『死んだ！』

シュレーディンガーの僕

走狗流歌

――これは、言葉が力を持つ世界でのお話。

夏の日差しが残る初秋。空は突き抜けるように青く、冷たい風がそっと頬をなでる。

そんな、少し肌寒い早朝。通学路を行くのは、勘のいい人は分かるだろうあの二人。

「おっはよー、葬屋クン！　相変わらず陰気くさい顔してんなー！」

「んだよ、朝から鬱陶しいな、颯火」

「鬱陶しいのはお前の前髪だっつーの。いい加減切れよ」

「うっせー」

「そんなことしたって生来の三白眼は治らないぜ？」

「うっせーッ！　お前だって前まで延ばしてたじゃねーか！」

「もうそういう時代は過ぎたんだよ。よし、取りあえずピンで止めよう！　何色がいい？　ラッキーカラー？　え、お前何座だっけ？　ヤクザ？」

「ど突くぞ」

朝から妙にテンションの高い少年、悼颯火（いたみそうか）を、不機嫌そうにあしらうのは弔祇葬屋（とむらぎそうや）。

現在中学三年生、進路迷走中のスーパーＭＡＸ受験生。終わってしまった夏休みと、秋の風がそろそろやばいぜと二人を急かしています。まあ、分かる人には分かる某シリーズの主人公だったりするわけですが、今回は番外も番外、路地裏三番地くらいの話なので詳しい話はカットしましょう。

進路の「し」の字も出てこない馬鹿話を続けながら歩く二人。颯火は占い雑誌を開いて言う。

「あ、俺今日超運勢いいじゃん！　何、ずっと喧嘩してた友達と仲直りできるかもだってよ葬屋ァ！　ついに俺達の果てなし落ちなし意味なしの戦いにも終止符が打たれるぜ！」

「やったな、今日がお前の命日だ！」

「あはははは、葬屋怖いぜ何カッカしてんだよ。平和に行こうぜ。ラブアンドピース！」

「オッケー颯火、拳で語り合って友情度アップだ！」

「いやちょっと待てタンマ葬屋こぶしいいつつなんでキックの体勢にアベバッ！？」

葬屋のハイキックを鳩尾にモロ受けして、身体をくの字にまげてうめく颯火。

朝から元気ですね受験生。今日の運勢より数ヵ月後のことはなしたらどうですか。

葬屋はため息をひとつついて、颯火が取り落とした占い雑誌をパラパラと捲る。

「男が占いとか言い出すのどうよ、キモいだろ」

「おいおい葬屋クンよぉ、このご時世でそんな台詞はナンセンスだぜ？　今占い流行ってんだよ。知らねーの、占研のやつ」

「ああ、最近よくビラ配ってる、」

占研とは、占術研究会の略で、葬屋たちが通っている中学校の部活のひとつです。見るからに胡散臭い部活ですが、最近その占いが当たるということで、恋に悩めるＪＣから、将来が心配な受験生まで、多くの生徒が彼らにその運勢を占ってもらっているようですね。その所為もあって、校内では空前の占いブーム。男子も女子も今日の運勢だとかラッキーカラーとか気にしているので、颯火の行動は別に珍しいことではないのです。

颯火も受験生としてやはり今後の運勢とか気になっちゃう感じなんですかね。

「その占いがめちゃくちゃ当たるんだけど、ただ一つ条件があるんだよ」

「は、条件？」

葬屋が話しに食いついてきたのにしたり顔の颯火は、さらに話を続ける。

「占いの結果を必ず誰かに話さなきゃいけないんだって。そうすれば、占いの通りに

なるとか」
「ふーん、でもそれじゃあ悪い結果も本当になっちゃうのか？」
「いや、悪い結果が出た時は、それと反対のことを話して回るんだってよ。そうすれば、悪い未来を避けることが出来るみたいで、別れそうだったカップルがよりを戻したり、フられるはずだった子が好きな人と付き合うことになったりしたみたいだぜ」
なんだか妙に饒舌な颯火に、葬屋は何かを察したように、ははあと笑って、
「颯火ァ、お前、やけに執心だな」
「……なー、葬屋ぁ」
「なーに、颯火」
「占いとか興味」
「ない」
「最後まで言わせろォオッ！」
真顔でバッサリの葬屋。表情には出てませんがめちゃくちゃ楽しそうです。
こいつら他人を弄る時に一番輝きますよね。不毛な関係です。
そんなドライクールな葬屋に涙目な颯火は自棄になって叫ぶ。
「だって気になるだろ恋愛運とか恋愛運とか恋愛運とかァ！」
そこは勉強運って言ってください受験生。
こいつの頭は年中春だったようです。そんなんでサクラサクのか心配です。
こんなにモノローグが受験雰囲気を演出してるのに、当の本人らがまったく勉強の話をしないとかどうなってんですかこの話は……、え、私だけから回ってる？　嘘だ！
「恋愛恋愛ってお前、女子かよ…」
「女々しくて悪かったな！　女顔で悪かったな！　俺なりにこの彼女いない残念な人生に危機感を抱いてるんだよ！　お前も少しは考えたらどうだ！」
「いや、お前、俺たちそれより別に心配すべきことがあると思う」
まったくです。
そこで、わめいていた颯火は、それこそ頭上に電球が点いたように、はたと手を打ってニヤリ。
「いーこと思い付いちゃったー」
あ、私失敗する方に千円かけますね。

И

さて、勉強ができないジレンマに、数学でシャーペンを放り投げ、理科で試験管を放り投げ、英語でＣＤを放り投げ、社会で地図を破り捨てつつ、昼には弁当片手に箸でケンカしたりと、アクティブな一日を過ごした二人は、珍しく別の帰路に着いた。
というのも、颯火が今朝思いついた計画を実行に移す為、一人になる必要があったからです。
「ははは…、我ながら完っっ璧だ……」
そう、男子トイレで不気味に笑うブレザー姿の颯火。
ただし、スカート着用。
「いや、さすが俺、スカート履いてもこの違和感のなさ…、ほれぼれするぜ…」
少し長い髪にピンを挿し、ネクタイがあるべき場所には大きなリボン。声は裏声でカバー。鏡の前でくるくる回って全身を確認しますが、パッと見普通に女の子です。伊達に女顔してませんね。
そう、颯火の作戦とは、男子一人で占いに行くのは恥ずかしいので、女装して行けば女の子だし占いとか普通だよね？という、題して、男の子じゃないから恥ずかしくないもん作戦なのです！
占いひとつにココまで男を捨てられる颯火くんは一回りして逆に男ですね！

しかし、男子トイレでニヤニヤしてる女装野郎とか、ただの変態です。
そんなこんなで颯火くん改めイタミちゃんは、占研の部室へ直行。怪しげな黒幕をくぐり、蝋燭の光だけがともる薄暗い部室の中へ入る。
「すいませーん、あの、占って欲しいんですけど～」
「こちらですよ」
かすかな声がして、黒幕の間からゆらりと手招き。颯火は誘われるままに奥へ。
「どうぞ、お座りください」
入ると、黒いフードを目深にかぶった生徒の目の前の席を勧められた。机の上にはそれっぽい水晶とか、それっぽい髑髏。物は安っぽいですが、部屋の雰囲気がそれを感じさせません。
「僕は占術研究会部長、未来知予（みさきちよ）。貴方は私に占ってもらいに来たのですよね？」
抑揚無く語る部長・未来。髪も長く中性的な声だが、フードから覗く顔を見るとどうやら男子のようです。颯火は進められた席に座り、静かにうなずく。
「貴方の名前は？」
「イタミです」
「イタミさんですか。女性の方ですから、恋愛の相談で、よろしいですか？」
自然な流れで語る未来。部屋の薄暗さも功を奏し、どうやら颯火の女装作戦は成功したようです。
颯火は心の中でガッツポーズを決めながら、その様子をおくびも出さず真剣に問う。
「恋人が出来るかどうか視てもらいたいんですけど、」
「分かりました」
未来は神妙にうなずくと、白い手袋をした右手を颯火の顔にかざし、目を閉じた。何事かぶつぶつとつぶやくと、ハッと目を開き、静かに手を引いた。
「桜の中、恋人と並んで歩く貴方の姿が視えました」
「本当ですかッ！？」
つい前のめりになる颯火に、未来は柔らかに微笑んで言う。
「ええ、安心してください。来年の春までにきっと素敵な彼氏にめぐり合えますよ」
「……ハイ？」
未来の言葉に、目が点の颯火。そんな颯火に未来は不思議そうに繰り返す。
「ですから、来春までには彼氏が……」
「……え？　あ、あー、あああああしまったァアアッ！」
「どうかしました？」
「すいませんごめんなさい今の全部無かったことにしてください私のことは忘れてください探さないでくださいさようならぁあああッ！」
頭を抱えてものすごい勢いで立ち上がった颯火は、そのまま逃げるようにその場を立ち去った。

「あのな……途中までは完璧な計画だったんだよ……」
「いや、最初から色々とダメだろ」
勢いあまってイタミちゃん状態で下校し、そのまま葬屋の家に突撃した颯火は、幼馴染の女装姿にこれ異常ないほどの白い目を向ける葬屋に一部始終を説明。正座でうな垂れ、己の過ちを悔いる。
「女装していったら彼氏が出来るかどうか占うに決まってるじゃネーか……！」
そう、未来は颯火を完全に女子と認識して占っていたのですから、彼女が出来るかどうか占うはずありませんよね。正直ちょっと考えれば分かることです。馬鹿ですね。
「俺が欲しいのは彼女だよ！　彼氏イラねーよ！　女の子がいいよ！　俺はノーマルだよッ！　進路変更は高校だけでいいよ！　やめてよ！　俺の青春返せよ！」

「落ち着けって。てか、あんまり言ってると本当になっちまうんじゃね？」
「いやだぁあああああァァアアああうああッ！」
「ていうか、コレであの占いがインチキだってことがわかったじゃねーか。お前を男だって見抜けなかった時点でパチモンなんじゃね？」
確かに、占いが本物なら、颯火の性別くらい見抜けたはずです。完全に見かけに騙されていましたし、当たると噂の占いも所詮は中学生の真似事ということになりますね。でも、それならどうして、他の人の結果は本当になったんでしょう？
葬屋の言葉に、悲痛の大絶叫をしていた颯火も落ち着きを取り戻した。
「そうだよな…、大丈夫だよな、俺……」
「多分な。それよりその格好見てて複雑だから早く脱げ」
「手前…、俺を脱がして何をする気だッ！」
「死ねよ」
葬屋のローキックが光の速さで颯火の顎に直撃した。
その時の葬屋の目は、ドライアイスもビックリの冷たさだったという。

И

さて、スポーツの秋といえば体育祭。二人にとっては最後の体育祭です。
もちろん、夏休み終了時から、組ごとに練習が始まっていましたし、最後ということで、（颯火達が馬鹿なことをやっている間にも）誰もが気合を入れて練習に励み、優勝の二文字を目指して放課後や休み時間に汗を流していました。
そしてやってきた体育祭当日。皆最後の戦いにハイテンション、無駄に何度も円陣を組んで雄叫びを上げたりと奇怪な行動を……
あれ？　颯火達が所属する赤軍だけ、なんだか様子がおかしいですね？
「赤軍が負ける！？」
嘘だというように叫ぶ颯火に、クラスメイトの一人がうな垂れたまま言う。
「そうなんだよ。何でも、赤軍が勝つかどうか、何人か占ってもらったみたいなんだけど、みんな負けるって結果を言い渡されて…。それも、選手の誰かが怪我をするとか、欠席するとか、具体的で……、しかも、その結果を慌てたヤツが皆に言って回っちゃったんだよ！　もう避けられない運命なんだよ！」
「おい、たかが占いに、何もやる前から士気下げてどーすんだよ」
真っ青な顔で語るクラスメイトに、葬屋があきれたように言った。しかし、
「たかが占い！？　お前は未来さんの占いのすごさを知らないからそんなことが言えるんだ！　俺は占いの結果通りに成績が上がって、第一志望でA判定になった！」
「私はケンカしてた彼と仲直りして、一緒の高校に行こうって事になったわ！」
「俺だって、部活最後の試合で勝てたんだ！」
何人も畳み掛けるように未来の占い効果を叫ぶ。その勢いはどこか狂的です。
「未来さんの占いは本物なんだ！　だから俺達は絶対負けるんだ！」
「最後の体育祭だから……、勝ちたかったのに……」
葬式のような雰囲気の赤軍。思ったよりも未来の占いを信じている人は多いようで、軍のほぼ全員が『赤軍は負ける』と思い込んでしまっているようだ。
先日の女装事件で、未来の占いの信憑性に疑問を感じている二人だけ訝しげです。
「まさかそんな、本当に赤軍が負けるなんてことあるわけ…」
と、そんなどんよりした雰囲気の中始まった体育祭。
――その、『まさか』が起こりました。

赤軍、全敗。

とある選手は競技中に怪我をして続行不能、不慮の事故での敗北、徒競走では僅差で負けたりこけてしまったり脚をくじいたりと、不幸な出来事が続いて、まったく点数が振るわず、前半を終えた今、他の軍と大幅な点差をつけられてしまいました。
しかも、その事故がすべて、占いの結果通りなのです。
「ほら！　やっぱり言った通りじゃないか！」
団員の一人が嘆き混じりに叫んだ。周りの仲間もみな、もうダメだ…、と肩を落として負け戦モード。昼休み、せっかく仲間同士で弁当をつついているのに会話も盛り上がりません。他の軍も、まさか本当に…、とざわついて来ました。
「こんなことってあるのかよ…。占いだろ…？　これじゃ、予言じゃねぇか…」
三百点近く点差の開いた得点ボードを見て、愕然とつぶやく葬屋。
「おい、葬屋ァ！　あいつの占い、インチキじゃなかったのかよッ！」
「俺にもわかんねーよッ！　まさか…本当にあいつには未来が……」
「嘘だッ！　やめてくれッ！　それじゃあ俺春に彼氏持ちになっちまうッ！」
ゆゆしき事態に颯火は血相を変えて叫ぶ。マジでそれは一大事です。
「絶対何かある！　未来を探して問い詰めよう」
珍しく真剣な面持ちの颯火に、葬屋はうなずき、二人は昼飯片手に未来の捜索開始。
と、校内を歩き回ること二十分。食べていたおにぎりもすっかり胃に治まった頃体育館裏の水道に未来の姿を発見した。
「よっしゃ、ど突いて全部ゲロらせようぜ。行け、葬屋！　不良面の本領発びばっ？」
「静かに、何か言ってる」
颯火の口を押さえて物陰に隠れる葬屋。壁からそっと、未来を覗き見る。
「ふははは…！　まさしく完璧だ！　全て私の思うがままになっている…！　やはり私の考えは正しかったのだ…っ！」
一人で高笑いをする未来。相当怪しいです。やはり、何かありそうですね。
「言葉の力はすごい…！　その手の専門学校や、組織があるだけの利用価値が確かにある…っ！　コレさえあれば…世界掌握も夢ではない……ッ！」
なんだかすごい厨二病臭が漂ってきたところで、颯火と葬屋は一斉に飛び出し、驚く未来を抜群のチームワークで取り押さえた。
「な、なんだお前たちは！」
「この前は世話になったな、未来さん」
葬屋に腕をひねり上げられ、壁に押さえつけられている未来に、颯火はニヒルに笑って言う。未来は訝しげに眉をひそめた後、すぐに思い出したようで、
「お前……、まさかこの前の……！」
「イタミちゃんでーす☆　あの時はトンチンカンな占いありがとなチキショウ！」
「貴様…ッ、私を騙したな…ッ！」
「騙してるのはお前だろう、未来。あいつらに何を吹き込んだ！」
言いながら、腕をひねる手に力をこめる葬屋。未来は痛みにうめきながらも、勝ち誇った笑みで堂々と言う。
「ははは…、今更バレたところで支障は無いからな、特別に教えてやろう。私が使っていたのは占いではない、《言霊》だ」
言霊とは、言葉に宿る力のことで、この世界では火力水力電力等の力と並んで広く利用されているエネルギーのひとつです。誰にでも扱えてかつ強力な言葉の暴力ともいうべきこの力を正しく使うために、中学校の義務教育課程にも、その正しい使い方を学ぶカリキュラムが組み込まれています。
「君達はシュレーディンガーの猫と言うのを知っているかい？　いつ作動するか分からない毒ガス発生装置と猫を箱に入れておくと、猫が生きている状態と死んでいる状態が同時に進行する。そして、猫の生死を観測者が認識するという、外からの働きかけで状況が決定する理念だ」

「何が言いたい」
急かす葬屋に、未来は、つまりだ、と笑いながら言う、
「猫の生死は認識によって確定される。猫は死んだという《観測結果》があれば、死んだことになるのだ。それが偽物であろうと、周りが本物だと認識しさえすればな」
「その《観測結果》を告げる観測者がお前だとでもいうのか？　でも、お前が一人そんなことを言ったところで、誰も信じるわけ…」
「一人？　違うな」
葬屋の反論に、未来は、くく、と笑いをこらえながら言う。
「『赤軍が負ける』と言っているのは私一人ではないだろう？　占いの結果を聞いた多くの者が、『赤軍は負ける』と『言って』いる！　そうして、声に出すことで、その言霊は人間を含む外界、状況に作用し、『赤軍は負ける』という《観測結果》を現実にするんだ！　私は未来を視ているんじゃない、未来を決定しているんだよ！」
高らかに言う未来。未来が占いの結果を多くの人に話すように言った理由はここにあったのです。シュレーディンガーの猫のように、不確定で多くの可能性が混ざり合い存在する《未来》を、あたかも《観察》したかのように占い結果としてそれを語り、さらに、それが多くの人に広まり、口にすることで、《観察結果》の言霊は大きな力を持ち、やがて外から働きかけることによって状況を決定してしまうまでになるという、集団心理を利用した巧妙な作戦だったのです。
状況を観測（コトダマ）によって決定する。
無意識うちに、生徒たちは自らの言霊で未来を決め付けてしまっていたのでした。
あ、読者さんついてこれてます？
「占いは当たるという噂も、この作戦を成功させるのに大いに役に立った。みな、私の《観測結果》を信じ込んで人に話す。確か、言霊は本心からの言葉だとより力が強いんだったな？　あははは、まったく笑いが止まらなかったよ」
「お前……ッ！」
「今回、赤軍が《観測結果》通りに負ければ、校内のほぼ全員が私の占いを強く信じることになる…！　あとはもう私の思い通りだ！　私の言うことは、やがて大きな言霊となり未来を決定して行くのだ。ふはははは！　同じように町、都市、国単位で民衆の信用を勝ち取っていけば、ゆくゆくは世界すらも私の思いのままだ！」
未来の高笑いとともに、昼休み終了の放送がかかる。葬屋は納得行かない表情で、舌打ちをしながら未来の拘束をといた。
「……俺達は、お前なんかに負けない！」
「はは、君達は負けるよ。負けて、私の大いなる力への礎となるんだ！」
そう言って、未来は歪んだ笑みを浮かべたまま手を振って校庭へと戻っていった。
「葬屋……、」
不安そうに言う颯火に、葬屋は悔しげに顔をしかめる。
「大丈夫だ、颯火。あいつがネタばらしをしてくれたんだ、打開策は……」
「いや、そうじゃなくて、」
真剣に語る葬屋を静止して颯火は問う。
「あいつの言ってることよくわかんなかったんだけど、どういうこと？」
「……、はぁあー…」
……頭痛くなってきました。

И

「というわけで、全部あいつの策略だったんだよ！」
軍のところへ戻った葬屋と颯火は、未来の言っていたことを団員に説明した。結局は、占い結果を信じこんでしまっていることが、占い結果を現実にしてしまう要因な

のだから、そこさえ変えてしまえばいいと考えたのです。しかし…、
「未来さんがそんなことを言うとは思えないよ」
「葬屋、敗北が受け入れられないのは分かるが、これは運命なんだよ」
「ち、違うんだって！　本当なんだ！」
必死に訴えかける葬屋を、もういいよ、とばかりに手で静止して、団員は各々の持ち場に戻って行く。なまじ、占い―という名の言霊で生徒達を幸せに導いていただけに、未来の信用はそう簡単には崩れそうにありません。
「どうすれば…、こんな雰囲気で最後の体育祭を終えるなんて絶対にいやだ…！」
「このレースで俺達が勝てばいいんだよ、そしたら占いなんてうそだって気付くさ」
言いながら軽い準備運動をする颯火。二人が出場するのは障害物競走。二人一組で、二人三脚、壁のぼり、二人縄跳びなど等、全長一キロのコースを五つの障害を越えて駆け抜けるハードな競技です。なんだかんだチームワークのいい二人は、三年間、この協議では負けたことがありません。順当に行けば一位はとれるでしょう。
颯火の言葉に、葬屋はうなずいて颯火の肩に手をかけ二人三脚の体勢。
『位置について、よーい……ドンッ！』
「「せーの！」」
スタートの合図とともに、二人は一歩踏み出した。が、しかし、早速足並みが揃わず倒れてしまいました。いったいどういうことでしょう…？
「おい、俺ちゃんと右足出したはずだぜ！？　なんだこれ！？」
「いいから早く！　いくぞ！」
立ち上がり走りだすがなんだか動きがぎこちない。足も何処か重い。ようやく第二障害に辿り着いた頃には他のチームにずいぶんと差をつけられていました。
「おかしい、さっきまでなんともなかったのに…っ！」
「もしや……、これが言霊の力なんじゃ……」
ふと赤軍の応援席を見ると、立ち上がり応援する者は一人もおらず、みな俯いて、「どうせ負けるんだ」「やったって意味ない」「無理だ」「どうせ」「結局」「負ける…」口々に『負ける』とつぶやいていた。その小さな言葉―言霊が寄り集まり、葬屋達選手に圧力をかけているのでした。
「っ、ダメだ、颯火！　無理だ、このままじゃ、負け……」
「馬鹿葬屋！」
壁の前で泣き言を言う葬屋に、颯火は叫んだ。
「俺たちまで諦めてどうするんだよ！　言霊は状況に作用するんだろ！？　じゃあ、俺達も同じように『勝てる』って信じて言えば、きっと勝てるんだよ！　まだ決まっていない！　まだ俺達は『死んで』なんかないんだ！」
今後どうなるか分からない、さまざまな可能性を同時にはらんでいるといえば、私たちもまた箱の中の猫です。しかし、状況を、未来を決定していくのは他の誰でもない自分自身なのです。今、彼らがしている行為は、箱の中の猫は死んだという言葉を鵜呑みにして、箱ごと全て焼き払ってしまう、生きているという可能性をつぶしてしまう行為に他なりません。
「勝つか負けるかなんて、やってみなきゃわからないだろ！」
そう言って壁を登りきり、葬屋に手を差し伸べた。
箱を開ける（その時が来る）までどうなるかなんて分からない。
今もまだ、勝てるという状態と負けるという状態は同時に存在している。
まだ、負けていない。確定していない。決定していない。終わっていない！
颯火の言葉に葬屋は深くうなずいて、颯火の手を掴んだ。
「俺達は勝てる！」
「絶対に勝てる！」
「負けるはずない！」

「負けるわけない！」
「「勝つ！」」
ふわ、と少し身体が軽くなり、壁を乗り越えた。二人はそのまま、勝てると叫びながら突き進んで行く。どんなに前のチームと離されていようと、諦めずに、走る！
そんな二人の様子に諦めモードの応援席がざわつき始め、うな垂れていた人も徐々に顔を挙げ、二人の勇姿を見届けている。
しかし、体は依然として重く、差もなかなか縮まない。このままでは……、
その時、
「がんばって――――ッ！」
赤軍の応援席から声が上がった。女子生徒が一人立ち上がり、応援を始めたのだ。
「まだ勝てるよ！　二人ならいけるよ！　がんばれぇえ――ッ！」
必死に声を張り上げる彼女の姿に、他の生徒も次々と立ち上がり、叫ぶ。
「がんばれ！」「勝てるぞ！」「お前らなら絶対負けない！」「勝てる！」「いけーッ！」
「おい、葬屋！」
「ああ、いけるぞ、颯火！」
応援席から声援が大きくなるにつれ、鉛のようだった身体は徐々に軽くなり、逆に、いつも以上のスピードが出始めた。ハードルと跳び箱を飛ぶように駆け抜け、一組抜かし二組抜かし、最後の二人縄跳びが終わる頃には再開から二位にのぼりつめていた。
声援と言う《言霊》が、二人に力を与え、不可能を可能にしようとしている。
まるで魔法のように。奇跡のように。
最後の五十メートルのストレート。一位との距離は約五メートル。
「いけー！　葬屋―ッ！　颯火―ッ！」「勝てるよー！」「がんばれーッ！！」
声援が追い風のように背中を押す。距離縮まっていき、ゴール直前でついに並んだ。
「いっけぇえええええええええぇぇぇえええええッ！」
二人はゴールテープに飛び込み、そのまま地面に倒れこんだ。
二度の銃声、ゴールの合図。少しの沈黙の後、結果のアナウンス。
『三年　障害物競走　一位　赤軍』
「っっっしゃぁあああぁぁぁあああああ――ッ！」
颯火は叫んでガッツポーズ。応援席からも歓喜の声が上がります。
颯火は座りこんだままの葬屋とハイタッチ。
「やったな」
「ああ」
にっと笑って、葬屋は颯火の手を借りて立ち上がった。汗は止まらず、息もなかなか整わないが、その疲れすら今はすがすがしかった。
「この調子で行くぜみんなぁあああああああああッ！」
颯火の呼びかけに応援席から元気よく返事が上がる。
その後はまさしく破竹の勢い。午後のほぼ全ての競技で一位を収め、他の軍との点差をぐんぐん縮めていきます。応援席からの声援はやまず、みな必死に声をあげます。
「馬鹿な…っ、私の計画が……ッ！」
自分が占った結果とまるで違う状況を、未来は愕然と見ていることしか出来ない。
そして、最終競技、色別リレー。
どの軍も点数は僅差。この競技で全てが決まります。
「勝つぞぉおおおおぉオオオッ！」
「「おおぉおおおおおおおッ！」」
赤軍も円陣を組み、気合を入れて勝負に挑みます。葬屋と颯火もその中に居ました。
銃声がなって、一斉にスタート。
一レース、二レースと、次々とバトンが回って行きます。実力は何処もほぼ互角、団子状態で迎えた最終レース！

「頼んだぞ葬屋ぁあぁッ！」
「任せろぉおおおおッ！」
颯火からバトンを受け取った葬屋は叫んで力強く走り出した。声援がいっそう大きくなる。最終コーナー、ついに一位の選手を抜かし葬屋がトップに躍り出た。そして、

И

『赤軍、世紀の大逆転！　インチキ占いに打ち勝ち逆転優勝』
翌日、校内新聞にはそんな見出しがでかでかと躍っていた。
そう、見事、色別リレーで一位と三位を獲得した赤軍は、他の軍を破って逆転優勝をとげたのでした。奇跡としかいえない快進撃でした。
もちろん、今回のことで未来のインチキと陰謀がばれ、占研の評判はガタ落ち。占いブームもあっという間に廃れ、首謀者・未来は一人ハンカチを噛み千切ることになりました。ざまあ！
「それにしても、言霊ってすげぇんだな…」
今回のことを振り返り、しみじみ言う葬屋。ただの声援が、軍の勝敗さえ左右したのですから、いやでも言霊の力を感じさせられます。
「今までは授業タルいなくらいにしか思ってなかった」
「だよなぁー。言葉ひとつでこんなに変わるなんてな…、」
ひひ、と颯火が笑いながら窓の外を見やると、すっかり秋めいた木々。昨日の熱と一緒に夏の暑さも一気に引いて、秋の風が校庭の砂をさらっている。
「……葬屋ぁ、俺、進路決まったよ」
「…はっ、奇遇だな、俺もだ、颯火」
その後、二人は言霊専門学校へ進学し、またそこでも馬鹿騒ぎをすることになるのだが、それはまた、別のお話。

【おまけ】
「俺ね、あの子、最初に応援してくれた子に告る。惚れた。ズガンと来た」
「なきたい時は俺のとこに来てもいいぜ、颯火」
「フられること前提で話するんじゃねェよ！　やってみなきゃわかんねーだろ！　それ今回の教訓だろッ？！　というわけで、行って来るからちょっとおまじないして」
「大丈夫、告白成功するヨ！　がんばってネ！　ファイト☆（棒読み）」
「俺優しいから真顔の声援でも許してやるけど後で覚悟しろ」
さらば俺の独り身ライフ！と高笑いしながらかけて行く颯火の背を笑顔で見送りながら葬屋は小さくつぶやく。
「……実はあの子彼氏持ちなんだよなー」
箱を開けるまでは分からないシュレーディンガー。
数分後、事実を知った颯火が涙目で戻ってきたのは言うまでもない。

【ＥＮＤ】